

SPEAKER COLLATING SYSTEM

Patent number: JP3175499

Publication date: 1991-07-30

Inventor: UNNO MASAYUKI; others: 01

Applicant: SEKISUI CHEM CO LTD

Classification:

- **international:** G10L3/00; G06F15/18

- **European:**

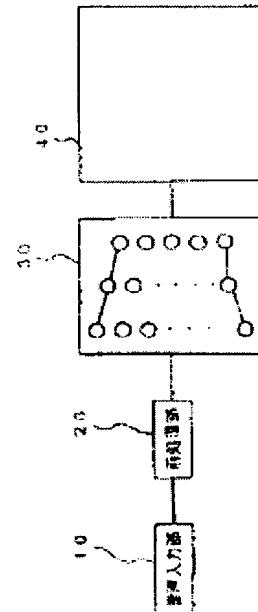
Application number: JP19890316073 19891204

Priority number(s):

Abstract of JP3175499

PURPOSE: To improve the collating rate and to shorten the processing time by generating a effective border between registered speakers and others efficiently.

CONSTITUTION: The system is constituted by coupling a voice input part 10, a preprocessing part 20, a collation neural network 30, and a decision circuit 40. Before the preprocessing part 20 preprocesses the input voice of an input speaker for learning and inputs data on the registered speaker and other unregistered speakers to the neural network 30 for the learning of the neural network 30, data close to the area of the registered speaker in a feature space and data filling other all areas effectively are selected among preprocessed data on unregistered speakers and only the selected preprocessed data are used as input data for learning for unregistered speakers. Thus, the data selected matching two selection conditions are used, so the collating rate is improved and the processing time is shortened.



(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特許公報 (B 2)

(11) 特許番号

特許第3175499号

(P 3175499)

(45) 発行日 平成13年6月11日 (2001. 6. 11)

(24) 登録日 平成13年4月6日 (2001. 4. 6)

(51) Int. C1. 7

G 02 B 6/12

識別記号

F I

G 02 B 6/12

F

請求項の数2

(全11頁)

(21) 出願番号 特願平6-257060

(73) 特許権者 000005120

日立電線株式会社

東京都千代田区大手町一丁目6番1号

(22) 出願日 平成6年10月21日 (1994. 10. 21)

(72) 発明者 荒井 英明

茨城県日立市日高町5丁目1番1号 日立電
線株式会社オプトロシステム研究所内

(65) 公開番号 特開平8-122545

(72) 発明者 上塚 尚登

茨城県日立市日高町5丁目1番1号 日立電
線株式会社オプトロシステム研究所内

(43) 公開日 平成8年5月17日 (1996. 5. 17)

審査請求日 平成11年7月2日 (1999. 7. 2)

審査官 岡田 吉美

(56) 参考文献 特開 平5-181172 (J P, A)

(58) 調査した分野 (Int. C1. 7, DB名)

G02B 6/12 - 6/14

(54) 【発明の名称】導波路型光合分波器

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】入力ポートであるポート1、ポート2、出力ポートであるポート3、ポート4を有し、ポート1とポート3を結ぶ導波路とポート2とポート4を結ぶ導波路の合計2本の導波路が、波長 λ での光の強度の結合率が $\kappa(\lambda)$ である2つの方向性結合器とその2つの方向性結合器を結ぶ位相差付与部を形成し、その位相差付与部ではポート1とポート3を結ぶ導波路の方がポート2とポート4を結ぶ導波路よりも長さが ΔL_1 だけ長い構造をした2つのマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器を有し、片方のマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器のポート1を1本の導波路で結び、この導波路よりも ΔL_2 だけ長い導波路で片方のマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器のポート3ともう一方のポート2を結んだ構成で、波長 λ_1, λ_3 を含む帯域の光を透過し、波長 λ_2 を含む帯域の光を結合する導波路型光合分波器において、 N_1, N_2 を整数、 $\text{neff}(\lambda)$ を導波路の波長 λ の光に対する等価屈折率としたとき、位相差付与部の導波路長差 $\Delta L_1, \Delta L_2$ 、

10 方向性結合器の波長 λ_2 の結合率 $\kappa(\lambda_2)$ が、次に示す条件式、

$$\Delta L_1 = (N_1 \pm 0.5) \cdot \lambda_3 / \text{neff}(\lambda_3) \quad (1)$$

$$P_c(\lambda_2) = 4 \cdot \kappa(\lambda_2) \cdot \{1 - \kappa(\lambda_2)\} \cdot \cos^2 \{\text{neff}(\lambda_2) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda_2\} = 0.5 \quad (2)$$

$$2 \cdot N_2 =$$

3

4

$$\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) / |\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) - \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2)| \quad (3)$$

$$\Delta L_2 = (N \pm 0.5) \cdot \lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) = N \cdot \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2) \quad (4)$$

を満たすことを特徴とした導波路型光合分波器。
【請求項 2】請求項 1 に記載の条件式(2) で示した波長*

$$P_c(\lambda) =$$

$$4 \cdot \kappa(\lambda) \cdot (1 - \kappa(\lambda)) \cdot \cos^2(\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda)$$

の微分 $dP_c(\lambda) / d\lambda$ が波長 λ_2 、あるいは λ_2 近傍の波長で 0 となるように、方向性結合器の結合率 $\kappa(\lambda)$ 、導波路の等価屈折率 $\text{neff}(\lambda)$ 及び位相差付与部の導波路長差 ΔL_1 を選定してなることを特徴とした導波路型光合分波器。

【発明の詳細な説明】

【0 0 0 1】

【産業上の利用分野】本発明は、2つの帯域の光を合分波するマッハツエンダ型の導波路型光合分波器に関するものである。

【0 0 0 2】

【従来の技術】

(従来例 1) マッハツエンダ干渉計の原理を応用した導波路型マッハツエンダ干渉計型光合分波器(以下、光合※20 の整数を N_2 としたとき、

$$\text{neff}(\lambda) \cdot \Delta L_2 = (N_2 \pm 0.5) \cdot \lambda_1 = N_2 \cdot \lambda_2 \quad (5)$$

の関係で与えられることである。式(5)から判るよう ★ ★ に、波長 λ_1 、波長 λ_2 は任意に得られるのではなく、

$$(\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1)) / |\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) - \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2)| = 2 \cdot N_2 \quad (6)$$

を満たす波長の組み合わせのみに制約される。なお、式

☆考慮した。

(6) では導波路の等価屈折率 $\text{neff}(\lambda)$ の波長依存性を☆

【0 0 0 4】式(5) は、

$$\Delta L_2 = (N_2 \pm 0.5) \cdot \lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) = N_2 \cdot \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2) \quad (7)$$

と書き換えられ、各ポートでの通過波長と阻止波長は、式(7)の ΔL_2 を定めることにより高精度に設定できる。

◆から結合ポート 2 6 への光の結合率を P_{2-3} 、入力ポート 2 5 から透過ポート 2 7 への光の透過率を P_{2-4} とする。

【0 0 0 5】この光合分波器において、入力ポート 2 5 ◆

$$P_{2-3} = 4 \cdot \{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \kappa(\lambda) \cdot \cos^2(\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_2 / \lambda) \quad (8)$$

$$P_{2-4} = \{1 - 2 \cdot \kappa(\lambda)\}^2 + 4 \cdot \kappa(\lambda) \cdot \{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \sin^2(\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_2 / \lambda) \quad (9)$$

で与えられる。なお、ここでは導波路の伝搬損失、散乱損失は無視している。式(5)から式(9)の $\kappa(\lambda)$ に注目すると、ポート 2 6 から取り出される光である波長 λ_2 の光の強度の結合率 $\kappa(\lambda_2)$ を 0.5 に設定することにより、低損失でクロストークが 0 の光合分波器を構成できることがわかる。

【0 0 0 6】この設計方法により波長 $\lambda_1 = 1.31 \mu m$ 、波長 $\lambda_2 = 1.53 \mu m$ として設計した光合分波器の特性を図 3 (b) に示す。

【0 0 0 7】(参照文献 1 : 電子情報通信学会論文誌 C-I Vol. J73-C-I No. 5 pp. 354-359 1990 年 5 月)

(従来例 2)

(従来例 1) で説明した光合分波器の通過波長帯域及び阻止波長帯域は狭く、実用化するためには帯域の拡大が

必要であった。そこで図 5 に示すような光合分波器が開発された。(参照文献 2 : T. Kominato et al ; Optical multi/demultiplexer with a modified Mach-Zender interferometer configuration ; OEC' 94, Technical digest pp. 174-175, July 12-15, 1994)

この(従来例 2)の光合分波器の要点は(従来例 1)の方向性結合器をマッハツエンダ干渉計型光合分波器で置き換える、さらに置き換えたマッハツエンダ干渉計型光合分波器(以下、ドーター MZ 合分波器と略す)の合分波特性により(従来例 1)の波長 λ_1 に加えて波長 λ_3 を透過するようにしたことにある。構造は図 5 (a) に示す様に、長さが ΔL_1 だけ異なる導波路 4 2 と導波路 4 3 からなる位相差付与部 4 4 と結合率が $\kappa(\lambda)$ である 50 方向性結合器 3 8, 3 9 で構成されるドーター MZ 合分

波器と、長さが ΔL_1 だけ異なる導波路4 8と導波路4 9からなる位相差付与部5 0と結合率が $\kappa(\lambda)$ である方向性結合器4 0, 4 1で構成されるドーターMZ合分波器が、上下反対に配置され、その2つのドーターMZ合分波器を長さが ΔL_2 だけ異なる導波路4 5と4 6で*

$$P_{2-4} = \{1 - 2 \cdot P_c(\lambda)\}^2 + 4 \cdot P_c(\lambda) \cdot \{1 - P_c(\lambda)\} \cdot \sin^2\{\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_2 / \lambda\} \quad (10)$$

$$P_{2-3} = 4 \cdot \{1 - P_c(\lambda)\} \cdot P_c(\lambda) \cdot \cos^2\{\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_2 / \lambda\} \quad (11)$$

$$P_c(\lambda) = 4 \cdot \{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \kappa(\lambda) \cdot \cos^2\{\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda\} \quad (13)$$

ここで、 ΔL_2 は(従来例1)と同様に式(5), (6), (7)から定められる。

【0009】ここで、方向性結合器の結合率 $\kappa(\lambda)$ と※

$$\text{neff}(\lambda) \cdot \Delta L_1 = (N_1 \pm 0.5) \cdot \lambda_2 / 2 = N_1 \cdot \lambda_3 / 2 \quad (14)$$

$$\kappa(\lambda_2) = 0.5 \quad (15)$$

により与えられる。ここで N_1 は整数であり、 λ_3 は波長 λ_1 に近い波長である。

【0010】以上の様な設計方法により波長 $\lambda_1 = 1.31 \mu m$ 、波長 $\lambda_2 = 1.53 \mu m$ 、波長 $\lambda_3 = 1.276 \mu m$ として設計した光合分波器の合分波特性を図5(b)に実線で示す。比較のため図5(b)中に点線で(従来例1)の合分波特性も示した。

【0011】

【発明が解決しようとする課題】(従来例2)では(従来例1)よりも片方の帯域を拡大することに成功している。しかし、導波路の幅あるいは屈折率を変えない限り、条件式(7)で整数 N_2 に対応して (λ_1, λ_2) の組み合わせが決まってしまう。また条件式(14)から整数 N_1 に対応して (λ_2, λ_3) の組み合わせが決まってしまう。さらに帯域を拡大するには λ_3 は λ_1 に近い波長という限定がある。よって、整数 N_2 と λ_2 を決めれば、他のすべての設計パラメータは選択の余地なく決まってしまい、設計の自由度が少ないという問題があった。

【0012】また、図5(b)からわかる様に(従来例2)は $1.3 \mu m$ 帯域においては(従来例1)よりも通過及び阻止波長帯域が広いが、 $1.5 \mu m$ 帯域においては逆に(従来例1)よりも通過及び阻止波長帯域が狭くなっている。この様に片方の帯域を狭めることなしに、もう一方の帯域を広げることができないという問題があつた。

$$\Delta L_1 = (N_1 \pm 0.5) \cdot \lambda_3 / \text{neff}(\lambda_3) \quad (1)$$

$$P_c(\lambda_2) = 4 \cdot \kappa(\lambda_2) \cdot \{1 - \kappa(\lambda_2)\} \cdot \cos^2\{\text{neff}(\lambda_2) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda_2\} = 0.5 \quad (2)$$

$$2 \cdot N_2 =$$

$$\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) / |\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) - \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2)| \quad (3)$$

$$\Delta L_2 = (N \pm 0.5) \cdot \lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) = N \cdot \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2) \quad (4)$$

を満たすことにある。

【0015】また、請求項2記載の本発明の要旨は、条 50

*結ぶ構造である。

【0008】この光合分波器において、入力ポート3 5から透過ポート3 7への光の透過率を P_{2-3} 、入力ポート3 5から結合ポート3 6への光の結合率を P_{2-4} とする

$$P_{2-4} = \{1 - 2 \cdot P_c(\lambda)\}^2 + 4 \cdot P_c(\lambda) \cdot \{1 - P_c(\lambda)\} \cdot \sin^2\{\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_2 / \lambda\} \quad (10)$$

$$P_{2-3} = 4 \cdot \{1 - P_c(\lambda)\} \cdot P_c(\lambda) \cdot \cos^2\{\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_2 / \lambda\} \quad (11)$$

$$P_c(\lambda) = 4 \cdot \{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \kappa(\lambda) \cdot \cos^2\{\text{neff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda\} \quad (13)$$

※ドーターMZ合分波器の位相差付与部の導波路長差 ΔL_1 は、

★【0013】本発明の目的は、上記課題を解決し、片方の帯域を狭めることなしにもう一方の帯域を拡大することにある。

【0014】

【課題を解決するための手段】請求項1記載の本発明の要旨は、入力ポートであるポート1、ポート2、出力ポートであるポート3、ポート4を有し、ポート1とポート3を結ぶ導波路とポート2とポート4を結ぶ導波路の合計2本の導波路が、波長 λ_1 での光の強度の結合率が $\kappa(\lambda)$ である2つの方向性結合器とその2つの方向性結合器を結ぶ位相差付与部を形成し、その位相差付与部ではポート1とポート3を結ぶ導波路の方がポート2とポート4を結ぶ導波路よりも長さが ΔL_1 だけ長い構造をした2つのマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器を有し、片方のマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器のポート4ともう一方のマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器のポート1を1本の導波路で結び、この導波路よりも ΔL_2 だけ長い導波路で片方のマッハツエンダ干渉計型導波路型光合分波器のポート3ともう一方のポート2を結んだ構成で、波長 λ_1, λ_3 を含む帯域の光を透過し、波長 λ_2 を含む帯域の光を結合する導波路型光合分波器において、 N_1, N_2 を整数、 $\text{neff}(\lambda)$ を導波路の波長 λ の光に対する等価屈折率としたとき、位相差付与部の導波路長差 $\Delta L_1, \Delta L_2$ 、方向性結合器の波長 λ_2 の結合率 $\kappa(\lambda_2)$ が、次に示す条件式、

$$\Delta L_1 = (N_1 \pm 0.5) \cdot \lambda_3 / \text{neff}(\lambda_3) \quad (1)$$

$$P_c(\lambda_2) = 4 \cdot \kappa(\lambda_2) \cdot \{1 - \kappa(\lambda_2)\} \cdot \cos^2\{\text{neff}(\lambda_2) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda_2\} = 0.5 \quad (2)$$

$$2 \cdot N_2 =$$

$$\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) / |\lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) - \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2)| \quad (3)$$

$$\Delta L_2 = (N \pm 0.5) \cdot \lambda_1 / \text{neff}(\lambda_1) = N \cdot \lambda_2 / \text{neff}(\lambda_2) \quad (4)$$

条件式(2)で示した波長の関数、

$$P_c(\lambda) =$$

7

の微分 $dP_c(\lambda) / d\lambda$ が波長 λ_2 、あるいは λ_2 近傍の波長で 0 となるように、方向性結合器の結合率 κ

(λ) 、導波路の等価屈折率 $n_{eff}(\lambda)$ 及び位相差付与部の導波路長差 ΔL_1 を選定してなることにある。

【0016】

【作用】本発明は、(従来例2)における条件式(14), (15)の代わりに、上記条件式(1), (2)を用いることで設計の自由度をましたことにある。

【0017】(従来例2)では、 λ_2 を決めれば、式(14)より λ_3 は 1 対 1 対応(正確に言えば、土の符号があるので 1 対 2 対応)で決まってしまう。

【0018】それに対して本発明では、条件式(1), *

$$P_c(\lambda) = 4 \cdot \{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \kappa(\lambda) \cdot \cos^2 \{n_{eff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda\}$$

$$dP_c(\lambda_2) / d\lambda = 0$$

8

* (2) を用いれば、 λ_2 とは無関係に入 λ_3 を決めることができる。

【0019】(従来例2)は、条件式(15)で $\kappa(\lambda_2)$ を 0.5 に限定しているが、本発明はその限定をなくして、その代わりに、条件式(2)を導入することにより、 λ_3 を λ_2 との 1 対 1 対応から解放したものである。

【0020】請求項2記載の本発明は、次に示す条件式(18)を用いて設計することにより、片方の帯域を狭めることなしに逆に少し広げて、もう一方の帯域を拡大したことにある。

【0021】

波長 λ の光が結合ポートに分波されるためには、

$$n_{eff}(\lambda) \cdot \Delta L_1 = N_1 \cdot \lambda \quad (19)$$

$$P_c(\lambda) = \{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot 4 \cdot \kappa(\lambda) \cdot \cos^2 \{n_{eff}(\lambda) \cdot \pi \cdot \Delta L_1 / \lambda\} = 0.5 \quad (20)$$

という条件を満たす必要がある。波長 λ_2 は条件式(5)及び(2)により式(19), (20)を満たすので分波される。帯域を広げるには、 λ_2 の付近の波長でも式(19), (20)を満たした状態に近づけることが必要である。そこで、本発明は、波長の関数 $P_c(\lambda)$ の変化率($dP_c(\lambda) / d\lambda$)を λ_2 の付近で最も小さくなるように設計したものである。

【0022】図6乃至図15に本発明の作用を説明するための図を示す。なお、以後の説明では、光合分波器の位相差付与部では、導波路長差だけ考慮にいれることにする(即ち、位相差付与部60において導波路58の長さを ΔL_1 、導波路59の長さを 0 とみなす。この様にしても理論上問題はない)。

※

※【0023】図6は光合分波器の入力ポート53aから電界振幅が E_0 、位相が 0 の光を入射した場合の、出力光の電界振幅と位相について説明する図である。ここで、結合ポート55から出力される光の電界振幅を E_1 、位相を θ_1 、透過ポート54から出力される光の電界振幅を E_2 、位相を θ_2 と書くことにする。そのとき θ_1 , θ_2 は、方向性結合器56, 57の結合率 $\kappa(\lambda)$ 、位相差付与部60の導波路長差 ΔL_1 、導波路の伝搬定数 $\beta(\lambda)$ を用いて、次の式で表すことができる。

【0024】

【数1】

$$\theta_1 = \tan^{-1} \left(\frac{1 + \cos \{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}}{\sin \{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}} \right)$$

$$\theta_2 = \tan^{-1} \left(\frac{\kappa(\lambda) \cdot \sin \{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}}{\{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \kappa(\lambda) \cdot \cos \{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}} \right)$$

$$\beta(\lambda) = \frac{2 \cdot \pi \cdot n_{eff}(\lambda)}{\lambda}$$

【0025】図6で出力された光と共に光を逆方向に入射した場合の様子を図7に示す。これは、即ち電界振幅が E_1 、位相が $-\theta_1$ である光を結合ポート55から、電界振幅が E_2 、位相が $-\theta_2$ である光を透過ポート54から同時に入射した場合、入力ポート53a

50

から電界振幅が E_0 の光が出射されることを意味している。つまり、入力ポート53aから光を入れた場合に結合ポート55、透過ポート54から出射される光と共に光を結合ポート55、透過ポート54から入射すれば、入力ポート53aに光は戻るということであ

る。なお、ここで位相は相対的な関係だけ考えればよいことを図9の説明のところで述べる。

【0026】図8は図6と同じ光合分波器の入力ポート53bから電界振幅がE₀、位相が0の光を入射した場合の、出力光の電界振幅と位相について説明する図である。ここで、ポート54から出力される光の電界振幅をE₁、位相をφ₁、ポート55から出力される光の電界振幅*

$$\phi_1 = \tan^{-1} \left(\frac{1 + \cos\{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}}{\sin\{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}} \right)$$

$$\phi_2 = \tan^{-1} \left(\frac{-\{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \sin\{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\}}{\{1 - \kappa(\lambda)\} \cdot \cos\{\beta(\lambda) \cdot \Delta L_1\} - \kappa(\lambda)} \right)$$

$$\beta(\lambda) = \frac{2 \cdot \pi \cdot n_{eff}(\lambda)}{\lambda}$$

【0028】図8で出力された光と共に他の光と、ポート55とポート54間での位相差と電界振幅が同じである光を逆方向に入射した場合の様子を図9に示す。これは、即ち図9で電界振幅がE₁、位相がポート54よりもφ₁ - φ₂だけ進んだ光をポート55から、電界振幅がE₂、位相がポート55よりもφ₁ - φ₂だけ遅れた光をポート54から同時に入射した場合、入力ポート53bから光が射出されることを意味している。つまり、入力ポート53bから光を入れた場合、射出された光とポート55とポート54での位相差が逆で、電界振幅が同じ光を逆に入射すれば、入力ポート53bに光が戻るということである。

【0029】次に、図6乃至図9で説明した考え方を用いて、本発明の動作を説明する。

【0030】図10に示す様に、説明のために本発明である光合分波器を3つの領域に分け、入射ポートから光を入射した場合の各領域での光の動きについて、図11乃至図15で説明する。

【0031】図11は領域1での光の電界振幅と位相を説明するための図である。電界振幅E₀の光を入力ポート61から入射したときの、結合した光の電界振幅をE₁、位相をθ₁、透過した光の電界振幅をE₂、位相をθ₂とすれば、請求項に示した条件式(2)から、波長λ※

$$\begin{aligned} E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 + \beta(\lambda) \cdot \Delta L\}] &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 + (2 \cdot N_2 \pm 1) \cdot \pi\}] \\ &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 \pm \pi\}] \\ &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot (\phi_2 - \phi_1)] \\ &= E_1 \cdot \exp[j \cdot (\phi_1 - \phi_2)] \end{aligned}$$

【0034】となる。

【0035】このように、波長λ₁に関しては、”導波路74に入射される光よりも導波路75に入射される光の方が、位相がθ₁ - θ₂ + (2 · N₂ ± 1) · πだけ進んでいる”ということは、”導波路74に入射される

*振幅をE₂、位相をφ₂とする。そのときφ₁、φ₂は、方向性結合器の結合率κ(λ)、位相差付与部の導波路長差△L、導波路の伝搬定数β(λ)を用いて、次の式で表すことができる。

【0027】

【数2】

※₂の光の場合は、E₁ = E₂であり、条件式(1)から、20 波長λ₃の光の場合は、E₁ = 0、E₂ = E₀であることが分かる。

【0032】図12は領域1で射出された光が、領域2に入射して、どのような位相変化をするか示したものである。ここでは、位相に関しては、同時に射出される光に対して、導波路71と導波路72間の差だけ考えればよい。よって、導波路71には電界振幅がE₁で、位相がθ₁ - θ₂の光が、導波路72には電界振幅がE₂、位相が0の光が射出されるものとする。射出された光は領域2で電界振幅は変化せず、位相のみ変化する。導波路71から射出される光の位相は、θ₁ - θ₂ + β(λ) · ΔL₂、導波路72から射出される光の位相は0である。ここで、条件式(3)、(4)から、波長λ₁では、β(λ₁) · ΔL₂ = (2 · N₂ ± 1) · π、波長λ₂では、β(λ₂) · ΔL₂ = 2 · N₂ · πであることが分かる。図13は領域2で射出された波長λ₁の光が、領域3に入射して、どのように透過ポートに出射されるかを説明する図である。ここで、詳しい説明を省くが、波長λ₁に対しては(φ₂ - φ₁) - (θ₁ - θ₂) = -πが成立立つ。よって、30

【0033】

【数3】

$$\begin{aligned} E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 + (2 \cdot N_2 \pm 1) \cdot \pi\}] &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 \pm \pi\}] \\ &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot (\phi_2 - \phi_1)] \\ &= E_1 \cdot \exp[j \cdot (\phi_1 - \phi_2)] \end{aligned}$$

光よりも導波路75に入射される光の方が、位相がφ₁ - φ₂だけ遅れている”(2 · πの整数倍の位相は0と同じである)のと同じであることが分かる。よって、この場合は導波路74に電界振幅がE₁、位相が-(φ₁ - φ₂)の光が、導波路75に電界振幅がE₂、位相が

0の光が入射されたことになるが、これは図9の場合と同じである（図9を上下逆にしてみればよく分かる）。従って、波長 λ_1 の光は透過ポートに出力されることが分かる。

【0036】図14は領域2で出射された波長 λ_2 の光*

$$\begin{aligned} E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 + \beta(\lambda_2) \cdot \Delta L\}] &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2 + 2 \cdot N_2 \cdot \pi\}] \\ &= E_1 \cdot \exp[-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2\}] \end{aligned}$$

【0038】となり、ここで波長 λ_2 では、 $E_1 = E_2$ であるから、図に示すように、”導波路74に電界振幅が E_1 、位相が $\theta_1 - \theta_2$ の光が、導波路75に電界振幅が E_2 、位相が0の光が入射される”ことは、”導波路74に電界振幅 E_2 、位相が0の光が、導波路75に電界振幅が E_1 、位相が $-(\theta_1 - \theta_2)$ の光が入射される”のと同じとみなすことができ、図14に示すように変換可能である。これは、図7の場合と同じである。従って、波長 λ_2 の光は結合ポートに出力されることが分かる。請求項2記載の本発明では、 E_1, E_2 の波長に対する変化率を波長 λ_2 で最小となるようにして、 λ_2 に近い波長では $E_1 \approx E_2$ とすることで帯域の狭まりを防いでいる。図15は領域2で出射された波長 λ_3 の光が、領域3に入射して、どのように透過ポートに出射されるかを説明する図である。波長 λ_3 の光の場合は、 $E_1 = 0, E_2 = E_0$ であるから、導波路75にのみ光が入射されたのと同じである。領域3を経て導波路74から出射される光の電界振幅を E_1 、導波路75から出射される光の電界振幅を E_2 とすると、ここでも、条件式(I)から、 $E_1 = 0, E_2 = E_0$ であることが分かる。従って、波長 λ_3 の光は透過ポートに出力されることになる。

【0039】

【実施例】以下に、本発明の実施例を図1乃至図3を参考しながら説明する。図1は本実施例に係わる導波路型光合分波器を示す図であり、同図(a)は平面図、同図(b)はa-a'線断面図である。図2は、本発明（請求項1）の実施例の導波路型光合分波器の損失波長特性を示す図であり、同図(a)は入力ポート18から光を入力した場合の結合ポート20での損失波長特性を、同図(b)は入力ポート18から光を入力した場合の透過ポート19での損失波長特性を示している。図3は、本発明（請求項2）の実施例の導波路型光合分波器の損失波長特性を示す図であり、同図(a)は入力ポート18から光を入力した場合の結合ポート20での損失波長特性を、同図(b)は入力ポート18から光を入力した場合の透過ポート19での損失波長特性を示している。

【0040】本実施例の導波路型光合分波器は図1に示すように、導波路2, 3が直線状に伸びたり、曲げ半径30mmで曲がったりすることにより形成されており、4つの方向性結合器5, 6, 7, 8とそれらを結ぶ位相差付与部11, 14, 17により構成されている。同図(b)に示すように、導波路2, 3は、基板1上に形成さ

*が、領域3に入射して、どのように結合ポートに出射されるかを説明する図である。

【0037】

【数4】

れたコア2a, 3aをクラッド4で覆ったものである。同図(b)に示すように方向性結合器5, 6, 7, 8は、10導波路2, 3が平行に間隔Gapで配置されたものであり、その平行部分の長さをLCで表すこととする。位相差付与部11は導波路9を導波路10よりも ΔL_1 だけ長くすることにより、位相差付与部14は導波路12を導波路13よりも ΔL_2 だけ長くすることにより、位相差付与部17は導波路16を導波路15よりも ΔL_3 だけ長くすることにより、位相差を与えていている。

【0041】基板1とクラッド4の屈折率は1.458、コアの屈折率は1.4624、コアの高さ、幅とも8μmである。材質は、基板1がSiO₂、クラッド4がSiO₂-B₂O₅-P₂O₅、コアがSiO₂-TiO₂である。

【0042】図1において、方向性結合器のGapを3.5μm、平行部の長さLCを213μm、位相差付与部11と17の導波路長差 ΔL_1 を1.293μm、位相差付与部14の導波路長差 ΔL_2 を3.171μmとした実施例の導波路型光合分波器の損失波長特性を図2中に実線により示す。ここで前記した波長 $\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3$ は、 $\lambda_1 = 1.31\mu m, \lambda_2 = 1.53\mu m, \lambda_3 = 1.25\mu m$ である。なお、図2中に比較のため破線により、（従来例2）の導波路型光合分波器の損失波長特性を示している。従来の設計方法では実線のような特性は実現できない。例えば、ここで仮に目標を、結合ポートでは波長 $\lambda = 1.24 \sim 1.32\mu m$ で25dB以上（枠21の外側を分光曲線が通ればよい）、波長 $\lambda = 1.525 \sim 1.535\mu m$ で0.05dB以下（枠22の外側を分光曲線が通ればよい）、透過ポートでは波長 $\lambda = 1.24 \sim 1.32\mu m$ で0.1dB以下（枠23の外側を分光曲線が通ればよい）、波長 $\lambda = 1.525\mu m \sim 1.535\mu m$ で20dB以上（枠24の外側を分光曲線が通ればよい）と定めると、本発明では、実線の特性を実現できるので目標を達成できるが、従来では達成できない。このように、本発明の導波路型光合分波器は目標に応じた設計の自由度の点で優れている。

【0043】図1において、方向性結合器のGapを3.84μm、平行部の長さLCを27μm、位相差付与部11と17の導波路長差 ΔL_1 を3.156μm、位相差付与部14の導波路長差 ΔL_2 を2.115μmとした実施例の導波路型光合分波器の損失波長特性を図3中に実線により示す。また比較のために図3中に破線

で（従来例 1）の導波路型光合分波器の損失波長特性を示してある。従来では、図 5 (b) に示すように、また前で述べたように、片方の帯域を広げるともう一方の帯域は狭くなってしまうという問題があったが、本発明の導波路型光合分波器は、図 3 に示すように、1. 3 μm 帯で帯域が広くなっているにもかかわらず、1. 5 3 μm 帯で帯域は狭くなっていない。むしろ、1. 5 3 μm 帯でも帯域が広くなっている。このように、分波する両方の帯域を広くできる点で本発明の導波路型光合分波器は優れている。

【0044】なお、実施例で用いた材料以外に、コアとしては $\text{SiO}_2 - \text{GeO}_2$ がよく用いられる。

【0045】基板、クラッド、コア材料としては以上に述べた以外にも、その他の誘電体材料、半導体材料、有機材料を用いることができる。

【0046】

【発明の効果】

(1) 請求項 1 記載の本発明によれば、片方の帯域を狭めることなしに、もう一方の帯域を広げた導波路型光合分波器を容易に実現することができる。

【0047】(2) 請求項 2 記載の本発明によれば、片方の帯域を狭めることなしに逆に少し広げて、もう一方の帯域を拡大できる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】本発明の実施例を示す図であり、同図 (a) は平面図、同図 (b) は $a - a'$ 断面図である。

【図 2】本発明（請求項 1）の実施例の光合分波器の損失波長特性のグラフである。

【図 3】本発明（請求項 2）の実施例の光合分波器の損失波長特性のグラフである。

【図 4】従来例を示す図であり、同図 (a) は従来の光合分波器の平面図、同図 (b) は損失波長特性のグラフである。

【図 5】従来例を示す図であり、同図 (a) は従来の光合分波器の平面図、同図 (b) は損失波長特性のグラフである。

【図 6】本発明の作用を説明する図である。

10 【図 7】本発明の作用を説明する図である。

【図 8】本発明の作用を説明する図である。

【図 9】本発明の作用を説明する図である。

【図 10】本発明の作用を説明する図である。

【図 11】本発明の作用を説明する図である。

【図 12】本発明の作用を説明する図である。

【図 13】本発明の作用を説明する図である。

【図 14】本発明の作用を説明する図である。

【図 15】本発明の作用を説明する図である。

【符号の説明】

20 1 基板

2、3 導波路

4 クラッド

5、6、7、8 方向性結合器

9、10、12、13、15、16 導波路

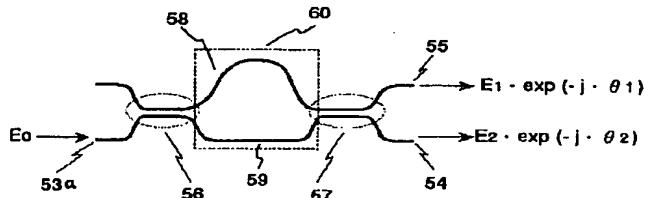
11、14、17 位相差付与部

18 入力ポート

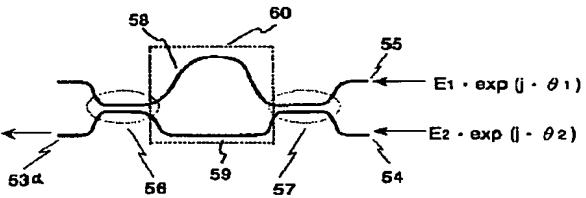
19 透過ポート

20 結合ポート

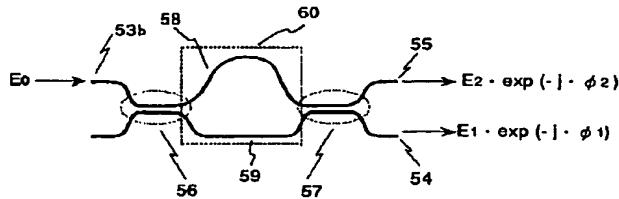
【図 6】



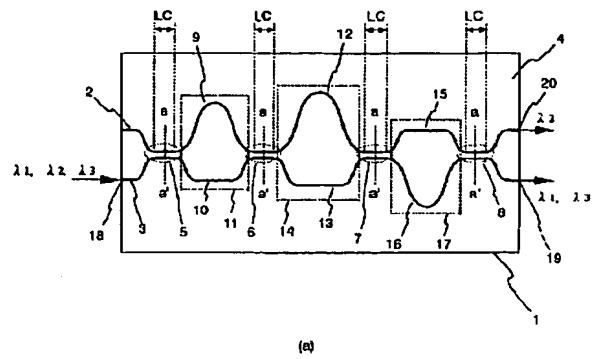
【図 7】



【図 8】

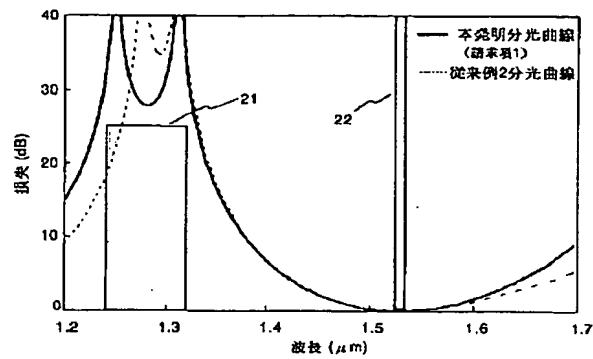


【図 1】

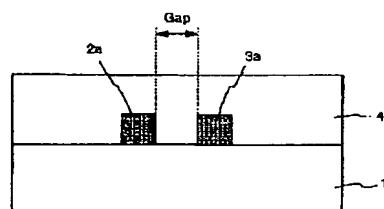


(a)

【図 2】

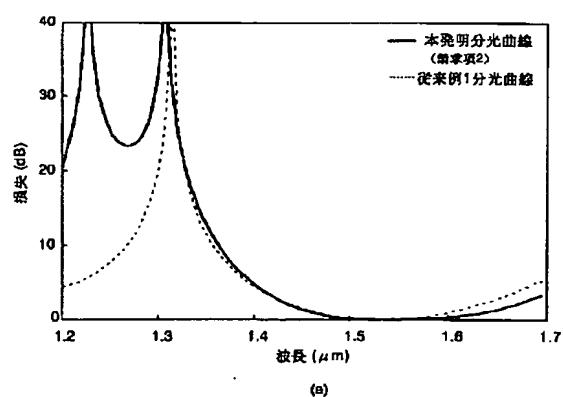


(a)

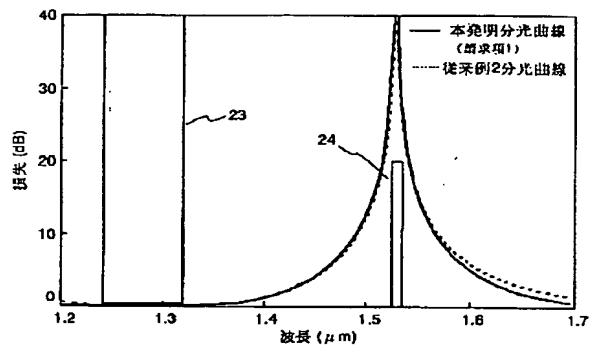


(b)

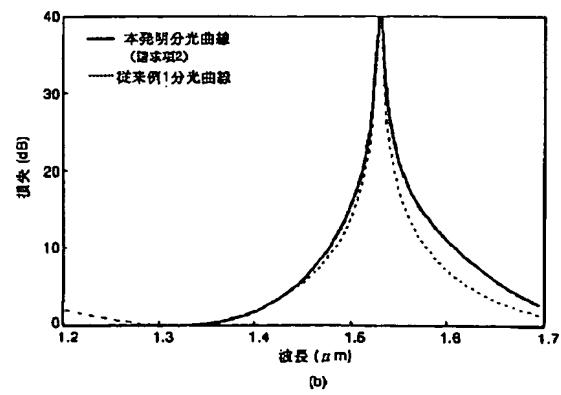
【図 3】



(a)

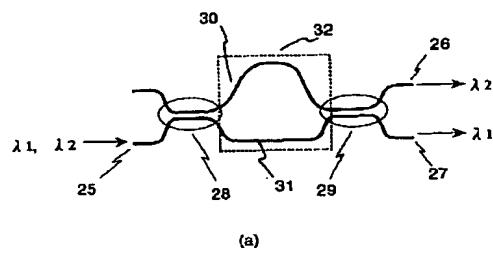


(b)



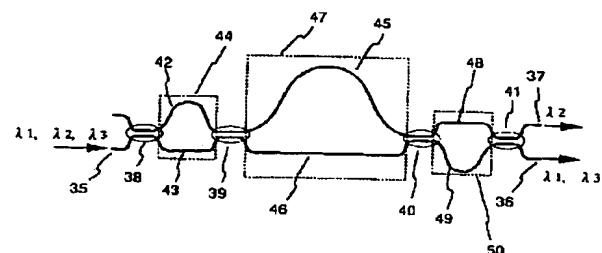
(b)

【図 4】

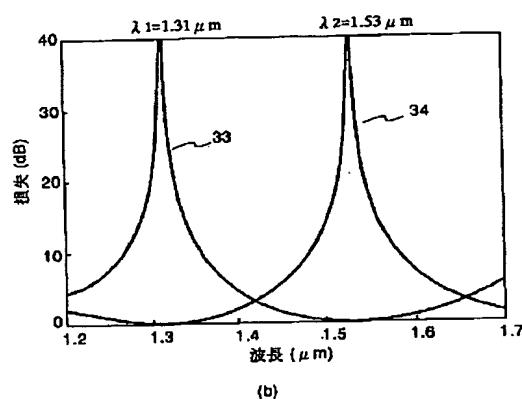


(a)

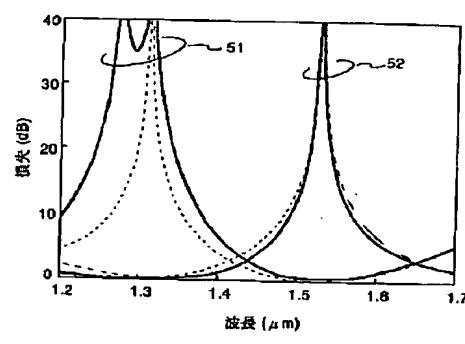
【図 5】



(a)

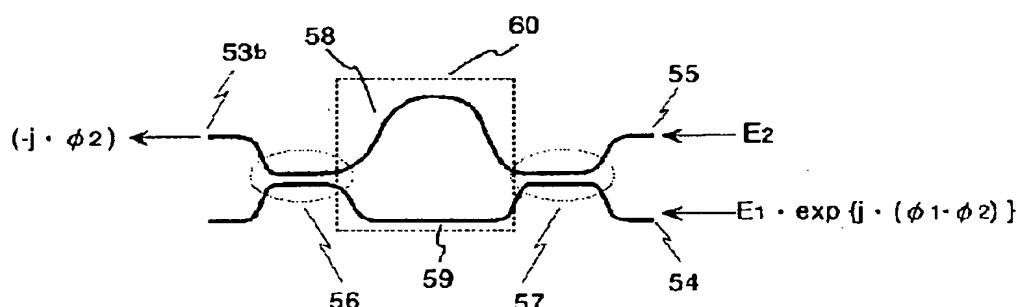


(b)

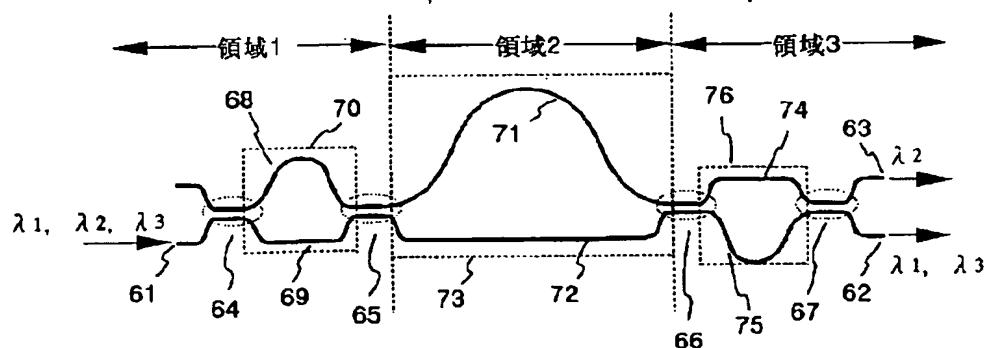


(b)

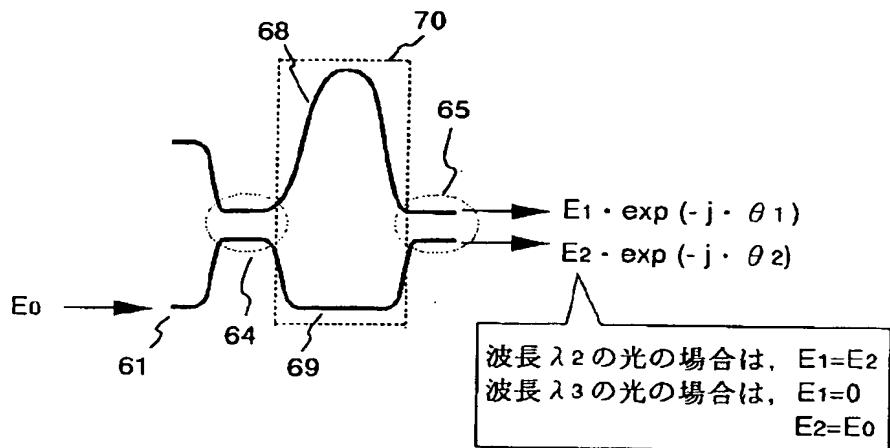
【図 9】



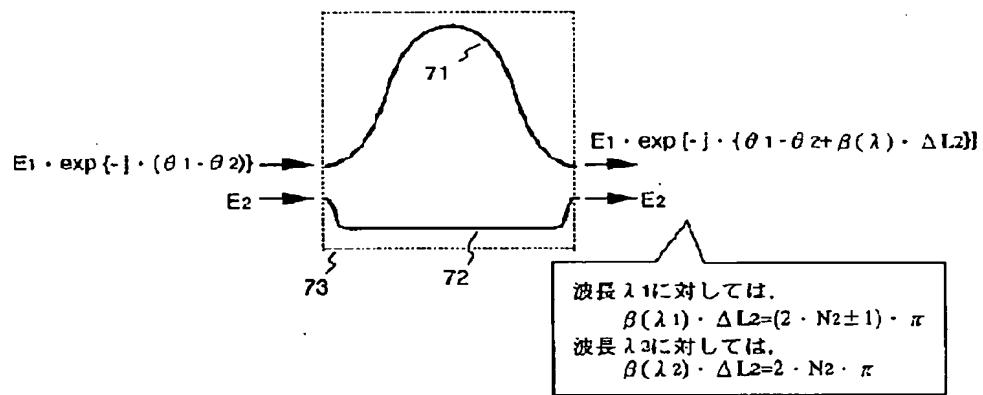
【図 10】



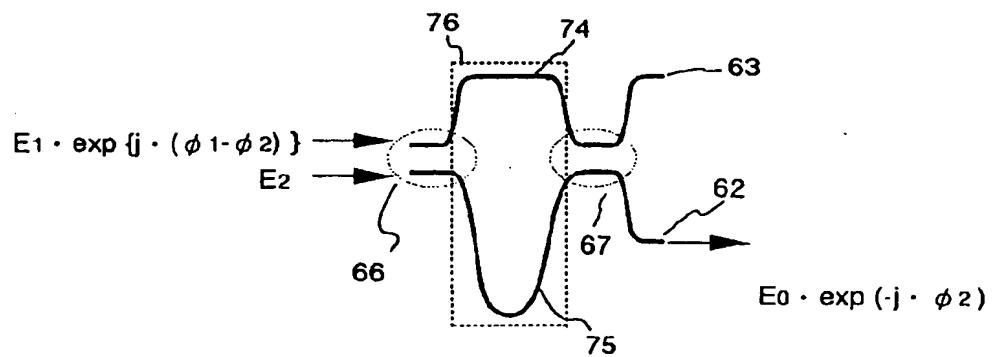
【図 1 1】



【図 1 2】

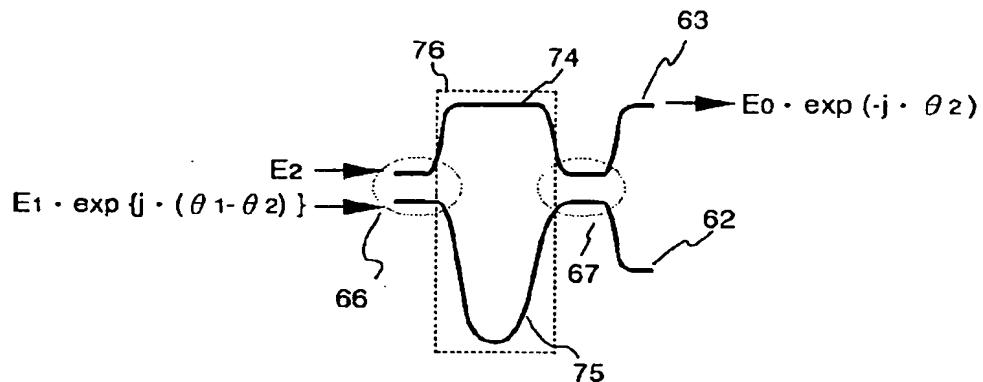


【図 1 3】



【図 1 4】

$$\begin{array}{ccc} E_1 \cdot \exp [-j \cdot \{\theta_1 - \theta_2\}] & \xrightarrow{\text{変換可能}} & E_2 \\ E_2 & & E_1 \cdot \exp [j \cdot \{\theta_1 - \theta_2\}] \end{array}$$



【図 1 5】

